

## 明治時代のサミュエル・ジョンソン

——『ラセラス』の流行とその背景——

川戸道昭

明治時代、とくにその前半において、巷間によく名前を知られた西洋の文学作品の一つにサミュエル・ジョンソン（一七〇九—八四年）の『ラセラス』がある。少なくとも明治十年代から二十年代に英語を学んだ学生でジョンソンの『ラセラス』の名前を知らない学生はなかったといっているほど、それは広く一般に普及していた。この事実は、現在では、わが国の西洋文学の受容史を専門に研究する人の間でさえ、すっかり顧みられなくなってしまうている事実のようだ。比較文学関係の辞典に当たっても、西洋の文学作品が日本の近代文学に及ぼした影響を論じた書物を繕いても、『ラセラス』があるいは作家ジョンソンがこの時期果たした重要な役割について触れているものはない。わずかに、明治十九（一八八六）年に丈山居士・草野宜隆なる人物が『ラセラス』の翻訳を出していることと、西洋文学紹介の草分け的存在である内田魯庵が明治二十七（一八九四）年にジョンソンの評伝を、民友社の内外文豪伝記シリーズの一篇として世に送っていること<sup>2</sup>が、西洋文学の受容史関係の書物から知られる程度である。しかし、それにもかかわらず、ジョンソンの『ラセラス』は、明治前半、一般にその名を知られた英学生必読の書物であった。そのことは、英学の揺籃期ともいうべき明治の前半に欧米の学問を志した数々の先達の証言から判断して、あるいは今に残るその教科書・註釈書・翻訳書の種類や重ねた版の数<sup>3</sup>から判断して間違いない事実であった。

〈東京の諸学校は英語の教科書として此書を用ゆるをもて、『ラセラス伝』の名は四書五経よりも更に広く英学書生の間に知らる。是れ明かにジョンソンの哲学を発表せしものにして『倫敦』或は『人間志望の虚栄』よりは遙に成熟したる思想を含蓄

せり。殊に母の喪に丁りて起草せしものなれば憂愁の気仄かに文字の間に纏綿して転た悽然たるを覚ゆ。其一々の妙味に到たりては江湖の能く諳んずる所なり。》

これは前述した内田魯庵の『ジョンソン』の中の一節である。江戸から明治にかけて寺子屋や小学校に学んだ者ならば、おおよそ四書・五経を知らないものはなかった。その四書・五経よりもさらに広く、『ラセラス』の名は明治期前半の英学生に知れわたっていたというのである。あるいは、魯庵は、また別のところではこうもいつている。「ジョンソンは実にはわが文海を乗切て英国文学の先登をなし、佐々木四郎高綱なり」と。宇治川の合戦に先陣を切った戦記中の武将にたとえるところなど、明治の文人ならではの発想で、思わず笑みがこぼれるところだ。もちろん魯庵自身も『ラセラス伝』と『ヴァニチイ、オプ、ヒューマン、ウツシエス』とは十年前某覺舎に於て講読した」と述懐している。魯庵一人では客観性に欠けるということであれば、もう一人明治の英学界の泰斗上田敏の言葉を借用してもいい。

《往年吾邦の人盛に英語を学修したる時、此『羅世刺斯伝』の如きを以て教材に充てたること久しく、今、新日本経営の衝に当れる人士の多くは、当年の学舎に在て荐に此書を講じたるものなり。近者外国語教修を口にする者、前制に多少の弊あるを認めし余、倉皇、他の極端に走りて、古書の精読を事とせざるに至りしは、羹に懲りて膾を吹き、角を矯めて牛を殺さむとするものに過ぎず、宜なる哉、新法に従て英語を習得したるもの、却て社会の要求に応ずる能はず、知識の獲得に成功せずして、其最も長じたるものにして、なほ僅に訳官通事の器たるのみなるも。予は先進の諸氏に比して生まるゝこと遙に後れ、旧制の外国語教修法に依て学ばさりきと雖、なほ嘗て中学に此書を通読したることありき。》

内田魯庵が「十年前某覺舎に於て講読した」というのは、その文章が書かれたのが明治二十七年であったことから判断して、明治十七、八年のことであつたと思われる。同様に、上田敏が「嘗て中学にこの書を通読した」というのは、仮にそれが第一高等中学校（後の第一高等学校）ではなくて静岡尋常中学校であつたとすると、明治十九年から二十年頃のことであつたと想像される。一方、上田がここに掲げた文章を書いたのは、明治三十八（一九〇五）年。二人が『ラセラス』を学んだときと、上田がそれ

を回顧する文章を書いたときとは約二十年の時の隔たりがあったと思われるが、その間に英語を学ぶ学生を取り巻く環境は一变した。

上田敏にとって、いや一人彼のみならず明治前半に英学を志した多くの人々にとって、外国語の学習は単なる技能の習得にとどまらず、同時に人格養成の手段という意味が込められていた。『ラセラス』のような一種人生指南の書物が、儒学ないしは漢文を習得する際の四書・五経に相当する書物として、広く読み継がれていったのもそのためである。

ところが、明治の三十年代ともなると、このような人格養成を兼ねた精神主義的英語教育は、実用主義の英語教育が叫ばれる中で、徐々に姿を消していった。目先の利益を重んじる実用主義の前に、すぐには成果を生み出さない教養主義が姿を消していくのは当然の成り行きであったが、上田のように、語学・文学の領域で頂点を極めた真の識者には、そうした実用一辺倒の英語教育がもたらす結果がどのようなものか、大方予測はできていた。彼は言う、「新法に従て英語を習得したるもの、却て社会の要求に応ずる能はず……その最も長じたるものにして、なほ僅に訳官通事の器たるのみなるも」と。この言葉の意味は、明治の世に、いや、同様な傾向をますます強めてきている今の世においても、充分に重い。

ともあれ、明治十年代・二十年代と三十年代とは英語教育に対する考え方が大きく変わった。しかし、この間に変化したのは単に英語の教授法だけではない。明治三十年代は、西洋の文芸・思想が次から次に発刊される雑誌や書物の紙面を埋めつくし、知識人たちの意識と情熱をさらっていった時代である。D・G・ロセッティの詩に、イプセンの劇に、ニーチェやW・モリスの思想に彼らの心は釘づけにされた。一たび、〈新しい女〉や〈超人〉や〈社会主義〉の考えに心を奪われた人々にとって、いままら道学者然としたアビシニアの王子の説く説教に耳を傾ける余地はなかった。かくして、一時は一通りの文法上の基礎を学んだ英学生ならば、みなよく「諳んず」るほど「其一々の妙味」に通じていた『ラセラス』も徐々に人々の念頭を離れていったのである。

一篇の小説の受容の変遷を辿るだけで、一国の英語教育法や文学・思想上の変化の流れを通覧できるというのまさすがにこの時代ならではのことだと思うが、それだけに明治の著名人たちがこの作品をいつ、どこで、どのように読んだのか、その詳しい実態を調査してみる価値も大きいということになる。あるいは、それを調べることによって、一介の貧乏書生から身を起こして一躍「新日本経営の衝」に当るに至った「人士」たちの心の裡を覗いて見ることができるかもしれない。文芸や思想の領域で新

開地を切り拓いた文士や学者の精神的な拠り所をうかがい知ることができるとも思えない。われわれは、この明治の知識人たちの心を育んだ『ラセラス』という作品の受容の流れに詳しい調査の光を投げかけてみる必要があるだろう。

## 一 『ラセラス』と明治の英語教育

英語教科書として定着するまで

『ラセラス』という作品は、一体どういう学生がどんな所で読んだのか。あるいは、どのような教師がどんな狙いを込めて教授したのか。現在手もとにある資料を見たかぎりでは、『ラセラス』をはじめて日本の教室で講じた人物は、お雇い外人教師ウィリアム・A・ホートン (William A. Houghton) <sup>(8)</sup> であった。時は明治十二(一八七九)年、正確に記すと、十二年九月に始まり十三年八月に終わる学年度に、東京大学の理学部第一学年の学生を対象に、『ラセラス』をテキストに用いたことが『東京大学法理文学部第八年報』<sup>(9)</sup> という当時の東京大学総理が文部卿に当てた報告書の中に記されている。具体的には、「スプレーグ氏」の「高妙文抄」の中の「スペンサル、ベーコン、バーク、ジョンソン『ラセラス』を読んだ」とある。この「スプレーグ氏」の「高妙文抄」という英文学の大家文集をホートンが使い始めたのは前年の十一年度が最初で、東京大学の『第七年報』(明治十一年)を見ると、法文学部一年の学生に同書の中から、チヨースー、スペンサー、シェークスピア、ミルトン、バニヤンを選んで読ませ、理学部においても一年の二学期に同書を使用したと報告されている。<sup>(10)</sup> 理学部では講じられた作品名が記されていないため、その中に十二年度と同じように『ラセラス』が含まれていたかどうかはつきりしないが、いずれにしても、手もとの資料で見ると、日本の学生に最初にこの小説を講じたのはお雇い外人教師ウィリアム・ホートンであったようだ。

明治十二年度以降、東京大学では毎年決まって『ラセラス』の名が使用教科書の一覧表の中に登場してくる。十三年から十四年に至る『年報』にはやはりホートン教授が、理学部の一年生を対象に「ジョンソン」の「ラッセラス、ライヴス、オフ、ポープ、エンド、ドライデン等ノ諸篇ヲ習読セシメ」<sup>(11)</sup> たとあり、同じ年の『東京大学一覽』の中には「教科書」として「ミルン氏訓解ジョンソン氏文集」という書名があげられている。<sup>(12)</sup> さらに、十五年から十六年度に至る『年報』を見ると、十五(一八八二)年

七月米国に帰国したホートンの名前は消えるが、代わって「英文学羅句語講師」神田乃武が、やはり理理学部の一年生の二学期に「ジョンソン氏ラセラス」を教授したと、彼の「申報」に報告されている。<sup>(13)</sup>同年の『東京大学予備門一覽』(予備門は第一高等学校の前身)によれば、神田乃武は「英語学」の教諭とあり、<sup>(14)</sup>大学の方は兼務であったことがわかるが、彼が大学と予備門を兼務していたということは『ラセラス』がその後急速に世に広まることと無関係ではなかったように思われる。というのは、明治十六(一八八三)年十二月末時点の理理学部一年の在籍者を調べてみると、その数はわずかに三名、<sup>(15)</sup>それにもかかわらず、同じ年度内の十七(一八八四)年五月、この小説は、東京大学法・理文学部刊行の英語テキストの一篇として刊行されることになるのである。<sup>(16)</sup>たかだか三名のために独自のテキストを印行するというのも妙な話だ。恐らくこれは、ホートン教授以来代々理理学部一年級の教科書として使用されてきた『ラセラス』が、ここに来て、神田乃武の手を経て大学予備門の教科書として併用されるに至ったことを物語るものではないだろうか。予備門の明治十六―十七年度の学生数の総計は三二二名、「課程」は三年ということである<sup>(17)</sup>から、一学年平均一〇〇名を超すことになり、何か新たなテキストを採用するととなると、どうしても独自の刊行を手がけなくてはならない状況にあった。

ともあれ、この明治十七(一八八四)年五月を境にして、『ラセラス』は全国津々浦々に普及していく。その原因として考えられるのは、まず第一に、それが最初に使用されたのが東京大学とその予備門であったということである。J・B・マコーレーの『ミルトン論』や『クライブ伝』、あるいはH・スペンサーの『代議政体論』というような、明治十年代から二十年代にかけて、全国の諸学校で採用されていた英文テキストは、その普及の経路を遡ると、ほとんどが東京大学およびその予備門に辿りつく。それほどこの両校は、法の統制下に置かれていた学制上の事柄はもちろんのこと、各校の裁量にゆだねられていたはずの教科書の選定等にいたるまで、全国諸校の範たる存在として絶大な影響力を有していたのである。裏を返せば、それほどこの時代の学校教育は右へ倣え式の、個性に乏しいものであった。

しかし、それもやむをえまい。なにしろ無から有を産みださなければならなかった混沌たる揺籃期の高等教育である。一方で、いち早くその門をたたいた先達が、卒業とともに己の経験を生かして、新たな学校の開設に力を尽くす。その学校は当然、母校東京大学をモデルとしたものであつたらう。また一方では、勉学の志に燃える多くの若者ため、大学予備門の入学に備えることを目的の一つとする学校が出現する。その教科目は当然のことながら大学予備門の科目を念頭において編成されたものであ

つたはずだ。東京専門学校、明治法律学校、専修学校、英吉利法律学校、東京英語学校、成立学舎……と、明治十年代から二十年代にかけて意気も高らかに前途有為の青年諸子を募っていた学校のどれ一つをとっても、両校の教育内容を色濃く反映していないものはなかった。

たとえば、東京専門学校の開設初年度、つまり明治十五（一八八二）年度の「英学科」で使用されたテキストと東京大学のテキストを比較してみればその様子がよくわかるだろう。マコーレーの『クライブ伝』、『ミルトン論』、『ヘスチングス伝』、『ハラム氏憲法史』、シェイクスピアの『ジュリアス・シーザー』、テインダルの『ペルフアースト、アドレス』、アンダーウッドの『大家文集』、スプレイグの『英国大家文集』等々、その大半は東京大学の教場でホートン教授や外山正一らによって講じられた教科書の踏襲であった。<sup>(18)</sup>『ラセラス』に関しても、最初はスプレイグの『英国大家文集』を通してごく限られた数の学生の目のみ触れていたものが、その後単独のテキストが刊行されるにおよび、広く一般学生の授業にも採用されるという、東京大学の場合と同じ経過をたどっている。この小説の名がはじめて東京専門学校の課程表に登場するのは明治十八年、つまり、『ラセラス』の英語副読本がはじめてわが国の書店から刊行される記念すべき年であった。<sup>(19)</sup>それ以降、明治三十一年にいたるまで、『ラセラス』はマコーレーの『クライブ伝』や『ヘスチングス伝』とともに、東京専門学校の課程表には毎年必ず登場する、いわば英学生必読のテキストとなっていたのである。<sup>(20)</sup>

このような状況は単に東京専門学校に限られたことではない。今、わたしの手もとは、明治二十五（一八九二）年に少年園から発行された『東京遊学案内』<sup>(21)</sup>という書物がある。これは東京の公立・私立の学校を網羅した入学案内で、東京帝国大学（明治十九年東京大学を改称）から私立の女学校に至るまで、個別に学校規則、学科課程表、学年歴などを掲載したものである。それによると、この年『ラセラス』を採用した学校には、共立学校、錦城学校、慶応義塾、国民英学会などがあつた。つまり本書に課程表が掲載されている学校の大半は『ラセラス』を教科書として使用していたのである。ここに名前の上がった各校は、慶応義塾を除くとみな、「官立学校受験生徒を養成す」<sup>(22)</sup>ることを目的とした学校で、中でも共立学校（後の開成中学校）は、明治四年の創立以来、「諸官立学校に入学した者無慮一千五百名」、「現に大学を卒業して学士となりたる者百七十名」<sup>(23)</sup>とあるのを見てわかるように、上級官立学校へ進学を希望する学生が集まるいわば予備校のような役割を果たしていた。『ラセラス』は、そうした日本の将来を担う若きホープたちが、だいたい第三年級の前期（錦城学校）<sup>(24)</sup>あるいは後期（共立学校）<sup>(25)</sup>に、『ユニオン第四読本』やマ

コーレーの『ヘスチングス伝』などとともに使用したテキストであったことがこの学校案内からわかるのである。

これは先に引用した内田魯庵の、「東京の諸学校は英語の教科書として此書を用ゆるをもて、『ラセラス伝』の名は四書五経よりも更に広く英学書生の間知らる」という言葉と完全に符合するものである。内田魯庵が、斎藤秀三郎が、夏目漱石が、土居晩翠が、上田敏が、恐らくはこの時期英語を学んだほとんどすべての人たちが一度は繙いたに違いない書物、それが『ラセラス』であったのである。

#### 当時の英語教育との関係

明治前半における一般の英語のレベルは今の人には想像もできないほど低かった。保険事業の普及していない時代のこととて、*fire insurance company* は火を確かめる会社のことだから消防組のことだろうと想像したのはまだいいとして、では *life insurance company* はとなると、生命を確かめる会社だからまさか葬儀屋でもあるまい、さて何だろうと想像さえつかなかった時代である。発音なども、*sometimes* が「ソメチメス」と読まれるくらいはまだいいほうで、*the name* は「トヒーナメー」、*other* は「オットヘル」となるなど、今では笑い話のような話が数多く残されている。

このような暗中模索の時代に、駆け出しの英学生が最初に読む副読本として『ラセラス』は果たして相応しいものであったかどうか。東京大学やその予備門のような程度語学の訓練を受けてきた学生を対象とする学校ならばまだしも、一般の英語学校のようなところまで競ってこの十八世紀の古典を課程表に加えていった狙いは一体どこにあったのか。英語を教えるならば「ナショナル」や「ユニオン」などの読本を徹底的に習得させればいい。副読本を使うにしてももっと新しい英文に習熟させるべきだ、とついつい現今の基準をもとに益のない批判をしたくなるのだが、当時の世にも同じ疑問を投げかける英学者はいた。明治二十四（一八九一）年十月刊行の『早稲田文学』の第一号には「英語と英文学」という題で次のような一文が掲載されている。

《英語の教課書と英文学の教課書とは自から別あり。若し英語を教ふるを主とせば、「ナショナル」、「ユニオン」、「チャムバ―」等の読本こそ、最も善く其の目的に適ふべけれ。然るに、府下諸私立英語学校の本意は必ずしもこゝにあらず、英語を教ふると同時に、高尚なる英文学の趣味を伝へんとするにや、今諸学校の課程表を見るに、其のザラに用ふる所の教課書、

多くは学生の学力には似ぬ甚だ高尚なる文学書にして、いわゆる「読本」類の如きは、最下の一二級に用ひらるゝか、誦読法の用に供せらるゝのみ。見よ、マツコーレーの論文、アルロングの記叙文、ゴールドスミスの小説、ジョンソンの『ラセラス』、ベーコンの論文などは、おのおの一世の名文たるに係らず、憐むべし、第四読本生のツ、キマはし、ヒネクリまはし、己に厭き、己に倦み、漸く軽蔑せんとするに至りたるを。」<sup>(8)(9)</sup>

名前こそ添えてはないが、これを書いたのは『早稲田文学』編集人坪内逍遙その人であった。後に、『文学その折々』という彼の著書の中に同文が収録されているところからそれがわかる。要するに、逍遙の批判を簡単に言うと、語学と文学の教材を混同してはならぬということのだが、そうしたごく当たり前の注意を必要とするほど、当時の英語教育には偏りが見られた。たとえば、その頃の英語雑誌に掲載された私立英語学校の広告などを見ると、当校で学んだ学生のうち帝国大学合格者何名、高等学校合格者何名というように盛んに合格者の数を誇示しているのが目につく。その点、当時の英語学校というのは、今の大学や高校の予備校とよく似ているのだが、違うのは、「受験用の英語」と同時に「高等の英文学」の教授を看板に掲げていた点である。<sup>(10)</sup> それも単なる看板倒れに終わらず、実際まともにそれを教授していた点である。

たとえば、磯辺弥一郎を会主とする国民英学会の明治二十五（一八九二）年の課程表をみると、最上級の「文学科」の欄には、スコット、カーライル、バイロン、テニソン、シェイクスピア、ミルトン等、英文学の大家の作品がずらり並んでいる。国民英学会が発行していた『英文学講義録』<sup>(11)</sup>にはこれらの作品の抜粋が収録されているところからみて、実際にこの課程表とそう違わない授業が行われていたと考えて間違いない。問題は、抜粋にせよ何にせよ、「文学科」という半年の年限にこれだけの作品を読みこなすことができたかどうかである。英語を習って三、四年、やっと「第四読本」を終えたばかりの学生が修める課程としては、やはり少々むりがある。逍遙が、先に挙げた文章の中で「文学趣味を先として、語学を後とし」、「耳学問の新聞屋文人」を養成する教育と揶揄するのは、恐らくこうした点を念頭においてのことだろう。一方では官立学校の試験に強い「目先ばかりの英学者」を生みだし、その一方で「耳学問」に長けた「鼻先英学者」を養成する、それが私立英語学校の実態であると逍遙は言うのである。<sup>(12)</sup>

しかし、それでは私立英語学校の教育がまったく実を結ぶこともなく無益に終わったかという点、決してそうではなかった。

「一世の名文」を「ツ、キマはし、ヒネクリマは」していたはずの「第四読本生」の中から、あるいは耳学問に長じた「鼻先英学者」の中から、日本の将来の方向を決定する文人、思想家、英学者が輩出するのだから教育というのは本当に不思議なものだ。杉村楚人冠、幸徳秋水、蒲原有明、二葉亭四迷、片上天弦、田山花袋、国木田独步、佐藤紅緑、小杉天外、澤村寅二郎、勝俣銓吉郎等々みな一度は私立英語学校に籍を置いたことのある人たちである。しかも、そのすべてが、国民英学会というたった一つの学校の卒業生ないしは中退者なのだ。蒲原有明はそこで夏目漱石からサツカレーの『ヴァニティー・フェア』の講義を聞き、高橋五郎の『チャイルド・ハロルド』に深く感銘を覚えたと自ら語っている。世に出る前の幸徳秋水がマコーレーやカーライルの英文に接したのもこの国民英学会においてであった。まさに私立英語学校、侮るべからずである。

しかし、一方において、逍遙が指摘するように、そうした英語学校の授業が英語、英文学どちらに主眼を置くかはつきりしない中途半端な授業であったのもまた紛れもない事実であった。明治二十五年の国民英学会の総生徒数は五四〇名にも達するが、そのうち同年十一月の卒業生は「訳読科」「正科」「文学科」「三科合わせて六〇名にすぎない。生徒の大半は英語、英文学のいずれもまともに身につかぬまま校舎を後にしていったのではなかったか。

明治三十年代に入ると、そうしたことへの反省もあつて、英語を教えるならば読本類、あるいは副読本を用いる場合でも現代作家の英文に限るといふ考えが次第に一般に浸透していった。ようやく英語の効果的学習法ということに人々の関心が向けられるようになった証拠ともいえるのだが、授業の中心がそれまでの文学の精読から日用英語の熟知徹底へと移っていった結果、今までとはまた違った混乱が生じるようになった。文学作品を「ヒネクリマはし」、「ツ、キマは」すという従来の英語学習法には確かに弊害も少なくなかったが、そこには英語を学習する目的のほかに、西洋の文学作品をとおして精神の修養に当たるといふ当時としては閑却できない重要な狙いも込められていたのだ。それが、実用の英語を重視するあまり、『ラセラス』のような古典の精読が顧みられなくなった結果、上田敏の指摘するように、「新法に従て英語を習得したるもの、却て社会の要求に応ずる能はず、知識の獲得に成功せずして」、その最も長じたものにしてせいぜいが「訳官通事」の域にとどまるといふ、従来とはまた違った弊害が懸念されるようになったのである。

このことは、単に上田敏の誇張的表現とばかりは言い切れない、当時にあつては社会全体の知的水準の低下にもつながる恐れのある重要な問題であつた。それほど明治時代の英語教育には大きな社会的使命が託されていたのである。明治四十二（一九〇

九)年二月発行の雑誌『太陽』には、明治の文芸史が特集されているが、その第二章、第四節「外国文学の紹介」の項は、「当時〔明治前半〕の英学生は、大部分皆な文学書に依って修業した。こは来るべき時代の文運には少からぬ影響あることであろう」という文章で結ばれている。一国の「文運」が、中等・高等教育の現場で行われる英語の授業にかかっているというのだから、その影響は甚大である。

英語の効率的学習法を優先させるか、古典文学の精読による精神の涵養を重視するか、明治三十年代以降の英語教師の脳裏には多かれ少なかれみなこの問題が存在した。かつて国民英学会で教鞭をとったこともあり、後に自ら正則英語学校の校主ともなった斎藤秀三郎も正面からこの問題と取り組んだ英学者の一人であったが、彼が考え出した方法は古典を読ませるとともに実用の英語も学ばせる、つまり古典文学を現代英語に書き改めた教科書を使うという方法であった。そもそも日本の学生が英語を学ぶ目的は何か、斎藤はそこから論を説き起こす。「日本の学生は英語のために英語を学ぶのではない。英語学者になることが彼らの目的ではないのだ。さりとてまた英文学の専門家になるというにもあらず。彼等が望むのは英文学を相当に読みこなすことができる程度に英語の力を高めること、そうして、英文学を勉強して、自己の教養を深め、単なる語学屋の域を脱することである」(原文英語)。日本の学生は英語の古典文学を読みたくてうずうずしているのに、残念ながら古い言葉の障害に阻まれて自由にそれを読みこなすことができない。そういう若い人々のために是非とも必要なのは古典を現代英語に書き改めることである。こうして代表的古典文学の改作シリーズ「錦文庫」が若い英学生たちの書架に並ぶことになった。その中の一篇に『ラセラス』があったことはいうまでもない。斎藤の門弟・土井晩翠の回想によれば、斎藤は仙台の私塾で教えていた時分からすでに『ラセラス』を教科書として使用していた<sup>41</sup>ということである。斎藤にとっても、この『ラセラス』という作品は若き日の机上を飾る思い出の書物の一つとなっていたのである。

## 二 『ラセラス』と明治の時代精神

「東京の諸学校は英語の教科書として『ラセラス伝』を用ゆ。此故にサミュエル、ジョンソンの名はマカウレイと共に早くより諸生の間に喧伝せられたりき」——明治二十七（一八九四）年四月、内田魯庵が『国民の友』に発表した『ラセラス伝』の作者」と題する論文の冒頭部分である。

この言葉からもはっきり読み取れるように、当時『ラセラス』の名が巷間に知れわたった最大の要因は、全国の学校がそれを英語の教科書として採用したことにある。各校がこの作品をテキストに採用していった理由として考えられるのは、前述したとおり、当時の学校には英語教科書を選定する際の独自の方針がなかったこと、つまり各校は教科書を選ぶ際に他の有力模範校の先例に倣うのを常としていた、ということである。一方、そうした有力校を卒業した人達が教師となつて各地に赴任し、母校においてかつて学んだ教科書を広めていったということもその一因として考えられる。あるいは、独自の選択をたくても、市場に出回る教科書の種類そのものが限られていたという当時の出版事情も考え合わせる必要があるかもしれない。

そのほかにも、幾つかの理由をあげることができるが、こうした外的要因とは別に、われわれは、作品そのものに備わる内的要因、すなわちこの作品が明治の学生や教師、あるいは文人に受け入れられやすい要素を備えていたということにも関心を向けてみなければならないだろう。ただ単に東京大学やその予備門で使用された教科書だから、あるいはどこの書店でも容易に手に入る教科書だからというだけでは、この作品が「江湖の能く諳んず」るまでに一般に普及した理由として、決して充分なものとはいえない。つまり、作品の内容とそれを受け入れた明治の人々の心的傾向という側面にもわれわれの関心を向けてみなければならないということになる。

日本の読者がはじめてジョンソンの名前に接したのは、『ラセラス』が教科書として普及する明治十七、八年よりかなり以前のことであった。明治四（一八七一）年に刊行された中村正直の『西国立志編』（サミュエル・スマイルズの *Self-Help* の訳）の中には、ジョンソンの言動にもとづく教訓めいた小話が二、三紹介されている。例えば、「金ヲ借ルコトノ危キ事」と題する一章では、ジョンソンがかつて人を戒めて、「借債ハ人生ノ災難ナリ、故ニ汝必ズ人ヨリ金を借マジト、志ヲ立ツベシ、抑モ儉約ハ、安静ノ基礎ナルノミナラズ、マタ仁恵ノ根源ナリ、自ラ助クル能ハザルモノハ、他人ヲ助クベキヤウナシ」と言ったということが紹介されている。ジョンソンに関する話は、数百にも及ぶ小話から成るこの書物全体のごく一部を占めるにすぎないが、『西国立志編』といえば、〈江湖〉にその名の知れわたった明治期屈指のベストセラーである。彼の生きた時代や思想など詳しいことはともかく、

サミュエル・ジョンソンの名前くらいは記憶にとどめていた人も少なくなかったのではないか。

さらに、この『西国立志編』の出版から三年を経た明治七（一八七四）年になると、やはり中村正直の『西国童子鑑』という書物が刊行され、その中で、今度は「評論家」ジョンソンの若年の経歴が紹介される。「潤孫ノ面目形貌、及び諸々ノ特異ノ事ハ、録セラレテ、世人ノ歓楽ニ供シ、ソノ著ハセル書冊ハ、伝ハリテ、後人ノ裨益トナリ、ソノ耳目ヲ悦バス、嗚呼カクノ如キ大人、ソノ童年ノ時ノ事、豈ニ他人ノ教訓トナルベキモノアラザルヲ得ンヤ」という調子の、<sup>(44)</sup>延々十七頁（和綴本ゆえ実際の頁は九丁）にわたる、伝記、というよりはむしろ泰西訓話集といった内容のものである。

明治の人々は、学童期に暗誦した『論語』や『孟子』が頭にこびりついて離れなかったためだろうか、「誰々曰く」、「誰々始めて何々を試みる時」といった類いの、今の時代の人間からするとまともに注意を傾けるに値しないような教訓小話を好んで読んだ。明治期に刊行された書物には「立志」「英傑」「英雄」「名士」「鑑」「修養」「立身」等々の言葉を伴った題名が、やたら目につく。江戸幕府が崩壊し、藩制が廃止され、士、農、工、商の身分に関わりなく、国民一人一人が「志を立て」、「名士」を「鑑」に「修養」を積んで、「立身」を目指すことが可能な時代になったのだ。彼らが新しく手本としたのは、見るもの聞くものすべて賛嘆、驚異の念を禁じ得ない西洋文明と、その文明を築いた西国の名士、英雄たちであった。福沢諭吉の『西洋事情』の出版が慶応二（一八六六）年、中村正直の『西国立志編』が明治四（一八七二）年、それ以降「西洋」「泰西」「西国」の文字を冠した「名士」「英雄」に関する書物は明治出版界の一大潮流を形成していく。ジョンソンの名前が日本全国津々浦々に知れわたっていくのは、彼の言葉や行動が、まさにこの一つの大きな流れとなった「西洋」の「名士」に関する書物の内容を充たすのいうってつけのものであったからにほかならない。

彼には「ジョンソン曰く」、「ジョンソン始めて一師に就き拉丁語を学ぶ時」といった類の語録、逸話が豊富にある。<sup>(45)</sup>ボズウエルの『ジョンソン伝』やピオツツイー夫人の『ジョンソン逸話集』<sup>(46)</sup>を開けばその種の話はいくらでも載っている。それに、なによりも、ジョンソンという人物は、自らの行動をもって範を示したことによりその名を知られた人物である。上に引いた『西国立志編』の中の借金をするな、儉約に努めよという話にしても、あるいは有名な、オックスフォードの宿舎から友の恵んでくれた靴を放り投げるという彼の独立不羈の精神を伝える話にしても、すべてはジョンソン自らが身をもって体験したことの中から引き出されてきた訓話であって、その不撓不屈の精神にあふれるジョンソンの伝記や逸話こそは、孔子や孟子の教訓に慣れ親し

んだ人々が緋くのに最も相応しい「泰西訓話」であったということができるのである。

### 文壇浄化の抛り所

このように、西洋の偉人を手本に自己の研鑽を積んで、やがては自らも立身出世の階段を登っていきたくいと願う人々の好みに投じる読み物となっていたジョンソンの伝記や語録であったが、それは単に個人が偉人の思想や伝記に接し己の蒙を啓くという狭い意味で人々の注目を集めていただけではなかった。一方において、彼の言葉や逸話は社会にはびこる弊風をしりぞけ、新しい日本の礎を築こうとする意欲にみちみたる知識人たちの主張の抛り所ともなっていたのである。「我が学界にジョンソンの盛んに噴々せらるゝはニュートン、ガリレオ、カント等と同じく辺陬の老学究すら能く其名を諳んず。然るに余が今更に物珍らしげに之を紹介する所以のもの深くジョンソンの生涯に鑑みて我が今日の文学界に慨する処多ければなり」<sup>(42)</sup>。前にも引いた内田魯庵の『「ラセラス伝」の作者」と題する論文中の一節である。魯庵のジョンソンを語る姿勢はに常に一貫したものである。信仰心なき軽佻浮薄の時代に一人敢然と異を唱え続けたジョンソンの行実に照らして、日本の文壇社会にはびこる弊風の排斥浄化に努めること、これがジョンソンを語る際の魯庵の終始変わらぬ姿勢であった。堅苦しい論文の中だけではない。『文学者となる法』のような諷刺の作においてもこの姿勢は一貫して変わっていない。

《ジョンソンは字典の編纂を終りし時人に語るらく、書肆は文学の保護者なりト。若し渠をして今の日本に生まれしめば如何。渠は人気を尊きをしらず、人氣に阿諛する事の却て名譽なるに心付かず、人氣の前に叩頭礼拝する作家の本分を忘るゝが故に、其『倫敦』其『ラセラス伝』その“Vanity of Human Wishes”等必ずや惣ての書肆に排斥せられて空しく屑籠の中に葬むらるゝ運命に陥りしなるべし。渠は呟くべし、書肆は人氣の保護者なりト。》<sup>(43)</sup>

この『文学者となる法』という作品は、三文字屋金平と名のる、いかにも人を食った感じの戯作調の人物に、表向きは文学者になる方法を伝授させるという形を取りながら、その実は当時の文壇社会の内情を戯画的にさらけ出すことを目的とした、今日われわれが読んでも大変おもしろい魯庵会心の諷刺作品である。魯庵自身はこれを自分の著書と認めてはいないが、この引用箇

所を先にあげた『ラセラス伝』の作者」の内容と照合してみれば、双方がほぼ同時期に同一人物の手になったということとは直ぐに察しがつく。それにもう一つ、評伝『ジョンソン』の内容を考え合わせれば、それが魯庵の著作であったことは疑いのないものとなる。ジョンソンの言動に鑑みて当時の日本の文壇社会の批判を行うという魯庵の狙いは、匿名の諷刺作品の中であろうが、文豪の生涯を対象とした評伝の中であろうが決して変わってはいない。「著者は十八世紀の腐敗を論じて暗に明治の今日を諷刺し、ジョンソンの行実を録して暗に明治の文士を戒めんとしたる跡歴々たり、随うて、此の伝論は正統の伝論といはんよりは、寧ろ史伝を材料として物したる時論とも評すべきもの也」<sup>(90)</sup>。一見ありふれた評伝のように見える『ジョンソン』の中にいち早く魯庵の本当の狙いを看取った坪内逍遙の言葉である。

魯庵は当時の文壇社会の弊風を正そうと思いついた。陋習は断固しりぞけなくてはならない。イギリスには浮華と虚栄に充ちた社会に向かって一人敢然と信ずるところを説いたジョンソンの例もあるではないか。そのジョンソンの言葉や伝記を読者に伝え、日本の文壇社会を改良する一助としていこう、と、恐らくこのような思いからジョンソンを題材とする論文が、諷刺作品が、評伝が矢継ぎ早に世に送られることになったのではなかったか。

ともあれ、魯庵の真の狙いはジョンソンを語るよりも、「明治の文士を戒め」ることの方にあつた。間違ひなく狙いはそこにあつたが、それにしても、ジョンソンの行実をもつて陋習を正す拠りどころにしようという以上、魯庵の心の裡には確固としたジョンソン像が存在していたはずである。われわれはその魯庵の懐くジョンソン像の方にも注意を向けてみなければならぬ。う。

《サミュエル、ジョンソン何人ぞ。オックスフォルドの大学に弊靴を引摺りし貧乏書生にして人の恵し靴を窓外に放擲せしだけの男なりき。而して不屈不撓、飽くまでも衆人の上に超然として流俗の奴隷とならず却て時世を指導するをもて其任となし、小にしてはクラブ街の猥陋なる習俗を矯正し、大にしては十八世紀を蒙蔽せる懷疑の暗雲を掃蕩したりき。／＼“Clear your mind of Cant!”——是ジョンソンが格言にして浮華と虚栄に充てる当世に向て教えぬ。『ラセラス伝』も“Vanity of Human Wishes”<sup>(91)</sup>や『ランブラア』に『アイドラー』に侃々せし諸篇も皆此信仰なき輕薄時代を諷誠せしにあらざるはなし。渠は実に一夫伝道者なり。》

皇帝や聖人ならばともかく、一文人をこんな風に褒めそやすのは、アンチ・ヒーローの時代に生きるわれわれには少々奇異に感じられなくもない。しかし、作家を政治家や発明家などともに同じ「偉人」の範疇に入れて、作品や文壇活動のみならず、私的な行動までも評価の対象とするのは、『西国立志編』以来「名士」「英雄」を扱った書物によく見られる傾向であった。

それと同時に、このような英雄論的作家批評は、魯庵がこれを書いた明治二十七（一八九四）年当時の文芸批評界の一大傾向となっていたものである。例えば当時最も広く読まれていた作家論はこんな調子のものであった。

《ジョンソンは彼の国民にとって予言者であった。人々に福音を説いた。——それは彼のような人はみないつもすることであった。……「なすべきことの多く、知り得ることの少ない世の中」だ。わが身を疑惑と悲惨な神を忘れた不信の果てしない底無し淵に沈めてはならない。——沈めてはみじめだ、無力だ、氣遣いざただ。……このような福音をジョンソンは説き、教えた。——それは原理的にも実践的にも次のもう一つの偉大な福音と対になっていた。それは「なんじの精神より偽善をされ！(Clear your mind of Cant)」ということであった。偽善と縁を断て。霜の日、冷いぬかるみに立て。それもなんじ自身の本当の破れ靴をはいてすることだ。……わたくしはこれを、一つに結び合わされたこれら二つのものを、一つの偉大な福音と呼ぶ、おそらくその当時可能であった最大の福音と呼ぶ。》<sup>(51)</sup>

明治二十年代以降急速に世に広まっていったトーマス・カーライルの『英雄崇拜論』の中の一節である。<sup>(52)</sup>これを先の魯庵の一文と比べてみれば、魯庵の懐く理想的ジョンソン像の拠って来たところが判然とするだろう。ジョンソンを「一大伝道者」と見なす考え方だけではない、そうした考えを伝える論調までもがカーライルの口吻をそのままとどめたものとなっている点にも留意する必要がある。『英雄崇拜論』に代表されるような偉人論的作家論がいかに当時の好尚に投じたものであったか、それを示すには、内村鑑三や高山樗牛の文を例に引くのも一つの方法かと思うが、ここでは『ラセラス』のテーマとも関連させるという意味で、ある書物が当時まったく顧みられなかったということを取り、この時代いかにそうした作家論が大勢を占めていたかを説明してみようと思う。

## 『カンディード』との比較

『ラセラス』というと、昔からよく引き合いに出される作品にヴォルテールの『カンディード』がある。両書は出版の時期がほとんど同じ(『カンディード』の出版は一七五九年二月。『ラセラス』はそれから約一カ月ほどして脱稿されたといわれる)というばかりか、その内容も、安易な楽天主義思想をしりぞける目的といい、主人公に世界各地を巡らせて世の中の見聞を積ませていくという趣向といい、双方大変よく似ているために、一七五九年の発表以来しばしば比較され、論評されてきた。

ところが、どういうわけか明治時代の日本では、『ラセラス』の方だけが盛んに読まれて『カンディード』はほとんど注目を集めることがなかった。稀に魯庵のような一部の西洋文学通が目を通すことはあったが、その読後評は、「ヴォルテールの原文は之を知らず。英訳文に就て云はゞ文章の良否は兎に角他の諸点に於て『ラセラス伝』を推さざるを得ず」と、あまり芳しいものはなかった。どうして『ラセラス』ばかりが受け容れられて、『カンディード』の方はいっこうに顧みられなかったのか——この疑問に答える一つの鍵となるのが、当時流行していた文学観、つまり『英雄崇拜論』に代表される偉人論的作家・作品論である。

カンディードは、偉大なる哲学者バングロス先生から、この世界は「あらゆる可能な世界の中の最善の世界」であるという教えを受ける。ところが、世間の荒波に浮き沈みしながら彼が目にしたものは、裏切り、略奪、凌辱、殺人、絞首刑、宗教裁判等々どれ一つを取っても人間の(たち)の悪さを証明するようなものばかりであった。旅の途中で出会ったソチン教徒マルチンの説によれば、「人間は不安の痙攣のなかか、さもなければ倦怠の深い睡りのなかで生きるために、日を過ごすように生まれてきたのだ」ということだった。しかし、カンディードはマルチンの説く厭世主義の思想にも、バングロスの教える楽天主義の思想にも同意することはできない。幾多の艱難辛苦を経た後に、最後に彼の掴んだ結論は、「ともあれ自分の畑を耕さねばならない」という、きわめて消極的な、しかしいたって現実的な結論であった。

一方『ラセラス』の方はどうか。「幸福の谷」の単調さに倦んだアビシニアの王子と王女は、この世の幸福を求めて世界各地を巡り歩くが、結局「青い鳥」は何処にも見つからないまま、彼らは祖国アビシニアに帰ってくる。祖国に戻って、分をわかまえ、性に従い、自ら安んずる生活を送ろうというのである。ラセラス王子が最後に達した結論は、幸福は求めて得られるものにあらずということであり、これは、カンディードの得た結論と同様、人のある行動へと駆り立てていくような積極的な結論とはい

がたい。しかし、一見したところ、同じように消極的な結論を導き出している二つの作品ではあるが、作者の意図するところはある一点をめぐって大きな相違を示している。つまり、その違いをレズリー・ステイヴンの言葉を借りて説明するならば、「ヴォルテールの門弟はさしずめ『自分の庭を耕して』思弁を放棄することを学ぶであろうが、しかしその場合に彼は思弁とともにいっさいの神学を放棄することになる。他方ジョンソンの門弟は創造主の究極的意図についての詮索を無益なものと放棄し、世に行なわれている信条をそのまま黙って受け入れるであろう」ということだ。思想的に見るかぎりでは二人の信条の間に大きな隔たりはないが、人生を導く動機を与えているという点に関していえばジョンソンの教えはヴォルテールの教えに遥かに勝る、というのがレズリー・ステイヴンの見解である。

カーライルもレズリー・ステイヴンも、本質的には、文学作品の評価に道徳上の基準をもち出すという、いわば十九世紀的な発想に導かれていた批評家であり、『カンディード』についても、懷疑主義を蔓延させる一因となつたとしりぞけるか、全面的にしりぞけないまでも、そこから引き出してくることができたのは「純粹に消極的」な教訓だけであつた。しかし、二十世紀の批評家は違ふ。カンディードが、パングロスの説く楽天主義に賛同することもなく、さりとてマルチンの懐く厭世主義の思想にも染まらずに、最後に「ともあれ自分の畑を耕さねばならない」という現実的な方向を選択するのは、ヴォルテールが近代科学の精神に導かれた思想家であつたことを示す証拠にほかならない。すべては良くない。しかし、すべては改良できる。人間は宇宙の残酷を取り除くことはできないが、慎重にやればそのある部分からしばらく身を守ることはできる。要はその方法を学ぶことである。つまり、ヴォルテールが説いているのはニュートンの科学なのだと、二十世紀のフランスの批評家アンドレ・モロワは言う。『カンディード』を読むたびに、眼の前が開けていくように感じられるのは、ヴォルテールの作品が、この世の幻想を一扫して、現実と人間知性の間にわだかまっている妖雲を吹き飛ばすのに貢献しているためだと、モロワは言うのである。

これを二十世紀のイギリスの批評家オルダス・ハックスレーの言葉に従つて解釈するならば、『カンディード』は「全面的真実」を伝えた小説ということになる。長い間捜してきたキユネゴント姫にやっと出会えたカンディードであつたが、姫の変貌ぶりを見て思わず身をのけぞらさずにはいられない。絶世の美女であつたキユネゴントが、日に焼けて、頸はかさかさ、頬は皺だらけ、腕は赤くさめ肌荒れているというのだ。ここまで書くのは少々悪趣味といえなくもないが、これは紛れもなく真実を伝えた文章である。二十世紀に至ると、世界の文学は、こうした「全面的真実」を意識する度合いをますます深めていった。少しでも重

要な仕事を残した作家で、「全面的真実」をなんらかの方法で伝えようとしなかった作家はいないといってもいいほどだ。『カンディード』が、二十世紀に入っても読者を失わずに読み継がれていったというのは、まさにそれが「全面的真実」を伝えた小説であったからにほかならない。

しかし、こと十九世紀の日本の話となると、状況はまったく違っていた。誰か偉大な人物の行動を手本に修養を積んで、やがては自身も名をなすことを願う人たちの好みに、ヴォルテールの暴露趣味が合うはずはない。やはり、彼らの求めに応じるには、どうしても「文人としての英雄」ジョンソンでなくてははならなかったのである。

### 『ラセラス』の変貌——明治三十年代以降の反応

では、『ラセラス』という作品は具体的に、どういう点が、明治の人々の心に訴えたのか。そのことを確認するために、同書の開巻冒頭の一節を以下に引いてみることにしよう。

《空想の囁きに易々と耳傾け、希望の幻影を熱烈に追わん輩、青春の望みは年長けて充されんことを期し、今日の不足は明日補われんことを期す輩よ。アビシニアの王子ラセラスが物語を聞きねかし。》

冒頭のこの予告通り、ラセラスと妹の王女ネカヤアは結局幸福さがしに失敗し、祖国アビシニアに帰ることになるのだが、なにも得られぬままに国へ帰って行く一行の様子が描かれる最終章は、従って、「何も結論することのない結論」という題名になっている。このように失望に始まり失望に終わる、いわゆる諦めの哲学こそは『ラセラス』一書を貫く根本哲学である。

〈みだりに虚望を懐くなかれ、懐いたところでも得られるものなぞありはしない〉というこの仏教の諦観にも似た戒めは、今日の考え方からすれば、あまりに「クライ」、あまりに自己抑制を強いる戒めと感じられるだろう。しかし、明治の世に生きる人々には必ずしもそうは受け止められなかった。開化だ、欧化だとはいってもそれはほんの上辺だけのこと、一皮むけばまだまだ古い伝統的な考え方が支配していた世の中である。現世を仮の世界と受け止める仏教思想に馴染んできた人々には、この西洋の「伝道者」の説くストイックな教えは、陰気などころか、むしろ親しみさえ感じられるものと映ったに違いない。

作品全体を貫くテーマの問題ばかりではない。物語の細部にいたるまで、『ラセラス』には明治の人々が長い間慣れ親しんできた日本の伝統的な考え方と本質的なところで通じ合う部分が少なかつた。たとえば、物語の中ほどのところに一人の高名な隠者の話がでてくる。<sup>(63)</sup>あるとき、ラセラス一行は、人生の奥義を訊ねようと、山間に一人修行に励む彼の庵を訪れる。ところが、意外なことに一行がその隠者から聞いたのは、人生の奥義ではなく、こんな孤独な生活は即刻打ち切つて明日にも山を下りようと思つてゐるといふ打ち明け話であつた。要するに彼にとつて山中は安心立命を得られる場所ではなかつたのだ。明治・大正期に活躍した英語・英文学者の高橋五郎は、その時の隠者の心境を、「世を捨て、山に入る人／山にても尚憂き時は何地行くらん」といふ日本の歌を例に引いて説明している。つまり、『ラセラス』には日本の伝統的詩歌の心に置き換えてみることができるよう、明治の人々にも必ずしも疎遠とはいえない問題が含まれていたのである。

単にこの隠者の話一つに限らない。幸福の探求に倦み果てたラセラスに向かつて詩人のイムラックは言う、「あなたは人生の選択をしてゐる間に、生きることを怠つてゐるように思われます」、ピラミッドの中に眠る古代の権力者も「我々のように人生の選択に夢中になつてゐる間に忽然と命を奪われたのかもしれない」と。この教訓もまた当時の日本人にはすでに馴染みの深いものであつた。例えばそれはこんな詩句に置き換えてみることができる。「人惟知求清福、而不知享清福……須知能享、則眼前即為淨土」。つまり、人は幸福を求めるばかりでそれを受け入れる術を知らない、己の心のもち方一つで苦難に満ちた眼前の世界も淨土に変わつて見えるものを、というのだ。この漢文もまた、前出の和歌同様、高橋五郎が『人生観』という書物の中で『ラセラス』の問題を解説するのに引用してゐるものである。<sup>(64)</sup>明治の人の道を求める姿勢には大変真剣なものがあつた。西洋の作家や哲学者の言説を引きながら人生の「現状」と「目的」について語つた高橋五郎の『人生観』は、明治三十六（一九〇三）年八月の初版出版以来、わずか二カ月足らずのうちに「七版」を数えるほどの大変な売れ行きを示している。『ラセラス』の流行は、このように明治の人々の烈々たる求道心に支えられるものであつたことを忘れるわけにはいかないのである。

高橋五郎の『人生観』が刊行された明治三十六年はまた、上田敏の例の有名な「山のあなた」といふ翻訳詩が発表された年でもある。この、明治以来多くの人々に愛唱されてきた「山のあなた」の詩と、ジョンソンの『ラセラス』とは、表現の形式こそ異なつてはいるが、その伝えている内容はまさに「人はただ清福を求めることを知るのみで、それを享受することを知らない（人惟知求清福、而不知享清福）」といふことであり、双方完全に同じ発想に導かれた作品と見ることができらるだろう。つまり、「今

日の不足は明日補われんことを期す輩よ。アピシニアの王子ラセラスが物語を聞きねかし」の一文をもつて始まる小説に「能く諳する」ほど通じた人々が、やがて浪漫主義的傾向をおびた新体詩が流行する明治三十年代に入って、好んで口ずさんだ詩、それが「山のあなたのそら遠く、／『さいはい』住むと人のいふ」であったのだ。そして、さらにその数年後、今度は、「山のあなた」の詩を口ずさんでいた一人の青年によってまた新たな作品が生み出されていく。

幾山河越えさり行かば寂しさの終てなむ国ぞ今日も旅ゆく

明治四十（一九〇七）年八月、雑誌『新声』に掲載された若山牧水の旅情歌である。幸福探求の主題からは少々はみ出す部分もあるが、この歌もまた『ラセラス』や「山のあなた」の詩と同じ系列に連なる作品と考えていいものだろう。このように、その時々々の流行や作家個人の心境に応じて、表現の形式を変え、浪漫主義的傾向を強めたり、日本的な哀調を帯びたりはしていくものの、『ラセラス』に見られる「人惟知求清福」のテーマはその後のわが国の文学の中に脈々と受け継がれていく基本的テーマの一つであった。明治三十年代以降、『ラセラス』が徐々に顧みられなくなるのはテーマの問題というよりは、テーマを展開させる方法が、あるいはその重々しい文体が時代の求めに合わなくなっていったためと考えることができるだろう。

## 【注】

- 1 『王子羅西拉斯伝記』草野宜隆訳・出版 明治一九（一八八六）年。
- 2 内田貢（魯庵）『ジョンソン』（拾式文豪号外）民友社、明治二七（一八九四）年。
- 3 明治期にわが国で刊行された英米の文学作品等を収めた英文の副読本約二〇〇点に關し、作家別、作品別、年代順の一覧表を作成してみたところ、明治期全体を通して最も刊行点数の多かった英文テキストは、マコーレーの『クライヴ』で一点、次いで『ラセラス』の一点、その次がマコーレーの『ヘイスティングス』の九点であった。『ラセラス』のテキストを年代順に掲げると、

- 明治 17 (一八八四) 年 5 月 [出版屈] *The History of Rasselas, Prince of Abyssinia*, Dept. of Literature, Tokio Daigaku. 123p.
- 18 (一八八五) 年 3 月 [出版屈] *The History of Rasselas, Prince of Abyssinia*, Tokio Publishing Co. 123p.
- 18 (一八八五) 年 3 月 [出版屈] *The History of Rasselas, Prince of Abyssinia*, Booksellers Associated. 123p. (これは前項の Tokyo Publishing Co. 版と同一の組み版。同盟出版社名も、届け出の日時も同じだったが中扉に記載された英文の社名のみ異なるもの。)
- 19 (一八八六) 年 6 月 *The History of Rasselas, Prince of Abyssinia*, Kikugokwan. 135p.
- 22 (一八八九) 年 2 月 *The History of Rasselas, Prince of Abyssinia*, Osaka. Hobunkwan. 123p.
- 23 (一八九〇) 年 *The History of Rasselas, Prince of Abyssinia*, Hakubunsha. 123p.
- 25 (一八九二) 年 *The History of Rasselas, Prince of Abyssinia*, Ohira & Co. 135p.
- 30 (一八九七) 年 *The History of Rasselas, Prince of Abyssinia*, Shoyeido. 135p.
- 43 (一九一〇) 年 *Rasselas, Prince of Abyssinia*, Kobunsha, 159p.
- 出版年無記載 *The History of Rasselas, Prince of Abyssinia*, George Routledge & Sons, London/ Z.P. Maruya & Co. 123p.

【参考】

大正 1 (一九一三) 年 8 月 *Johnson's Rasselas, Nichi-Eisha*. 11p.

となる。有斐閣書房が明治三七(一九〇四)年に刊行したある本の末尾に掲載された広告をみると、本書房発行の『ラセラス』(発行人が同じであることから二五年の Ohira & Co. のテキストを引き継いだものか)はこの年一九版を重ねてなお発売がつづけられていたとある。マコーレーの『クライヴ』と『ヘイスティングス』も同様に一九版とあるから、この三作は同書店発行のテキストの中で他の追従を許さない圧倒的なロングセラーであったことがわかる。また、明治時代に出版された『ラセラス』の翻訳をあげると次のようなものがあった。

明治 19 (一八八六) 年 2 月 王子羅西拉斯伝記 草野宜隆(文山居士)訳・出版 奎文堂売捌(後篇は同年 4 月刊)

- 23 (一八九〇)年4月 刺世拉斯伝 田村左衛士訳 文求堂 梅原支店  
 同年 10月 刺世拉斯経歴史 渡辺松茂訳 積善館  
 同年 12月 羅世良斯 福井有訳 豊住謹次郎  
 26 (一八九三)年4月 刺世拉斯史 直訳付 河田清彦訳 文港堂  
 26 (一八九三)年12月 ジョンソン氏ラセラス伝 注釈 大島国千代著 大島三郎  
 38 (一九〇五)年6月 王子羅世刺斯伝 芝野六助訳 大日本図書株式会社  
 42 (一九〇九)年12月 ラセラス王子物語 坂本栄吉(大風)訳 内外出版協会

このうち二〇年代までに出版された六点は英語を学ぶ学生のための独習用の訳本(書名に「直訳」の文字を伴うものが多いことから「直訳本」と呼ばれている)として出版され、利用された可能性が高い。このような英学生の独習用の訳本の数の上でも、『クライヴ』が一〇点、『ヘイスティングス』が七点、そして『ラセラス』が六点と、他を圧倒しており、やはり、この点からも、明治期の、特に一〇年代二〇年代の英語副読本のベスト3は上記三作であったことが裏づけられるのである。

- 4 内田 前掲書、一三一―三二二頁。  
 5 内田魯庵(不知庵主人)「『ラセラス伝』の作者」(『国民之友』二二二号、明治二七(一八九四)年)三四頁。  
 6 内田 前掲書、「例言」一頁。  
 7 上田敏「序詞」(芝野 前掲邦訳書)四―五頁。  
 8 William Houghton(1852-1917) 明治一〇(一八七七)年、東京開成学校英文学教師として招聘され、同一五(一八八二)年、満期前解任帰国。重久篤太郎『日本近世英学史(増補版)』(名著普及会、一九八二年)三二五―三三一頁参照。  
 9 『東京大学法理文学部第八年報』(『東京大学年報 第一巻』(東京大学出版会、一九九三年)に収録)。同年報に記載された東京大学の講義内容に関しては、柳田泉『西洋文学の移入』(春秋社、一九七四年)に掲載されている(一〇二頁)。なお、『英語青年』誌上に掲載された上野景福氏の「ホートンのシェイクスピア講義」という論文の中にも一部同書からの引用がある(同誌、vol. CXXXIII. No.10, 一九八七年)。  
 10 『東京大学法理文学部第七年報 自明治十一年九月至同十二年八月』(東京大学、明治一二(一八七九)年、六一―六三頁)。  
 11 『東京大学第一年報 起明治十三年九月止同十四年十二月』(東京大学、二五六頁)。

- 12 『東京大学法理文学部一覽 從明治十三年 至明治十四年』東京大学、丸屋善七、明治一四（一八八一）年、一一四頁。
- 13 『東京大学第三年報 起明治十五年九月 止同十六年十二月』東京大学、二五八頁。
- 14 『東京大学予備門一覽 本覽 自明治十五年 至明治十六年』東京大学予備門、丸屋善七、明治一五（一八八二）年、三四頁。
- 15 前掲『東京大学第三年報』、表「ち号」参照。
- 16 注3の『ラセラス』英文テキストの一覽表参照。
- 17 『東京大学予備門一覽 自明治十六年 至明治十七年』東京大学予備門、丸屋善七、明治一七（一八八四）年、参照。
- 18 『東京専門学校年報 明治十五年度』早稲田大学史編集所、一九八二年、参照。
- 19 『東京専門学校校則・学科配当資料』早稲田大学資料編集所、一九七八年、四七―四八頁。
- 20 この年、例えば六合館からは『クライヴ』や『ヘイスティングス』が、東京同盟出版書肆（Tokio Publishing Co.）からは『ラセラス』や『ミルトン論』が出版された。これらの副読本が刊行された前年の明治一七年に、東京同盟出版書肆から発行された『ヘイスティングス』の奥付には、「東京大学法理文三学部原刊／明治十七年六月十二日翻刻御届／同年八月出版」という、一般書店による英語副読本出版の起源を示唆する文字が見られる。詳しくは拙稿「明治時代の副読本」(I)、(II)参照『英学史研究』二七、三〇号、日本英学史学会、一九九四年、一九九七年。
- 21 前掲『東京専門学校年報・学科配当資料』参照。
- 22 『明治廿五年東京遊学案内』少年園、明治二五（一八九二）年七月。
- 23 前掲書、一五一―一五二頁、一六二頁。
- 24 前掲書、一五一―一五二頁。
- 25 前掲書、一五六頁。
- 26 前掲書、一四七頁。
- 27 石川正通「磯辺先生、人及び事業」(『英語青年』Vol. LXV, No. 7, 一九三一年、二七―二九頁)。
- 28 坪内雄蔵(逍遙)「英語と英文学」(『早稲田文学』第一号、明治二四（一八九一）年、二二―二四頁)、『早稲田文学』掲載のものは句読点がなく読みにくいため、ここでは次に掲げる『文学その折々』に再録されたものを引用した。坪内雄蔵『文学その折々』春陽堂、明治二九（一八九六）年、一三一―一五頁。
- 29 たとえば、「国民英学会規則摘要」参照。この「摘要」は次の本の巻末の広告として掲載されたもの。磯辺弥一郎『人肉質入裁判 講義録』

- 三省堂、再版訂正、明治二五（一八九二）年二月。
- 30 前掲『明治廿五年 東京遊学案内』一八一頁。
- 31 前掲書、一八三―八四頁。
- 32 国民英学会が発行した『英文学講義録』は明治二五（一八九二）年三月発行の第一巻から明治二七年六月発行の第七巻まで合計七冊存在する。スコットは *Lady of the Lake*、カーライルは *The History of the French Revolution*、バイロンは *Prisoner of Chillon*、テニソンは *Enoch Arden*、シェイクスピアは *Julius Caesar*、ミルトンは *Paradise Lost* 等の原文の抜粋が掲載されそれぞれ注釈や訳文が付けられている。
- 33 坪内 前掲書、一五頁。
- 34 磯辺弥一郎「国民英学会創立三十周年回想録」（『中外英字』第二五巻一〇号、一九一八年、三二二―三三頁）。
- 35 矢野峰人『蒲原有明研究』（近代作家研究叢書 32）日本図書センター、一九八四年、四四―四五頁。
- 36 磯辺弥一郎『英文学講義録』第四巻、国民英学会出版局、明治二六（一八九三）年参照。その末尾には明治二五（一八九二）年一二月一〇日に行われた国民英学会の第七回「卒業証授与式」において卒業証を授与された者の名簿が掲げられ、その中の「正科」の卒業生の一人として幸徳伝次郎（秋水）の名前が載っている。
- 37 卒業式は年に二回行われた。前掲書、巻末の「稟告」参照。
- 38 上田 前掲書、四頁。
- 39 『文芸史』（『太陽』臨時増刊一五巻三号、明治史第七編）博文館、明治四二（一九〇九）年、六一頁。
- 40 *Rasselas*, ed. Saito Hidesaburo (Tokyo: The Nichi-Eisha, 1912), pp. 1-iii. この斎藤秀三郎の『ラセラス』が発行されたのは大正元年八月二一日。わずか一カ月ほどの差で年号は大正となったが、明治時代の『ラセラス』の流行の最後を締め括る教科書として貴重な文献である。奥付以外は序文に至るまですべて英語で書かれている。シリーズの英語名は「The “Brocade” Series of Popular English Literature」ここに引用した「PREFACE」中の英文を以下に掲げておく。
- Japanese students do not study English for English's sake. They do not aim at making linguists of themselves; nor do they want to be specialists in English literature. What they desire is a fair mastery of the English language that shall enable them to study English literature at their ease, and a decent acquaintance with English literature that shall lift them above the level of the mere so-called “linguist”.
- 41 大村喜吉『斎藤秀三郎伝』吾妻書房、一九六〇年、八八頁。

- 42 内田 前掲論文、三四頁。
- 43 中村正直『正西国立志編』木平讓、明治一〇（一八七七）年、第一〇編、一九―二〇頁から引用。
- 44 中村正直『西国童子鑑』、同人社、明治六（一八七三）年、卷之三、一丁。
- 45 前掲書、卷之三、四丁。
- 46 内田魯庵は前掲の『ジョンソン』を執筆するにあたって、「ボスウエル本の外に参考せしものはピオツジ夫人の『ジョンソン行実』(Anecdotes of the late Samuel Johnson)なり」と「例言」に書いている。同書、「例言」二頁参照。
- 47 内田 前掲論文、三四頁。
- 48 内田魯庵『文学者となる法』、右文社、明治二七（一八九四）年、一七六―七七頁。
- 49 坪内逍遙「ジョンソン」、前掲書、六五七頁より引用。これも最初は『早稲田文学』に掲載されたもの。同誌第六九号、明治二七（一八九四）年、七七頁参照。
- 50 内田 前掲論文（『国民之友』二二四号、二六頁、二六頁）。この論文は『国民之友』の二二―二二四号に同じ表題のもとに連載されたもの。
- 51 Thomas Carlyle, *Heroes and Hero-Worship and the Heroic in History*, AMS Press, 1969, p.182. 訳文は以下に掲げる入江勇起男氏のものを用いた。『英雄と英雄崇拜』（カーライル選集Ⅱ）日本教文社、一九六二年、二六一―六二頁。
- 52 『英雄崇拜論』の訳は明治二〇年代だけでも次の二つのものがある。石田羊一郎・大屋八八郎訳『英雄崇拜論』、丸善、明治二六（一八九三）年、蘭山居士訳『詩人的英雄』、吉岡書店、明治二七（一八九四）年。両書ともに抄訳で、完訳としては明治三十一年に春陽堂から出版された土井晩翠の訳が最も早い。
- 53 内田 前掲論文、二六頁。
- 54 ヴォルテール『カンデイド』、吉村正一郎訳（岩波文庫、一九五六年）一六七頁。
- 55 前掲書、一七二頁参照。
- 56 Leslie Stephen, *History of English Thought in the Eighteenth Century*, Vol. II, Smith, Elder, & Co., 1876, p.374. 訳文は以下に掲げる中野好之氏のものを用いた。『十八世紀イギリス思想史』下（筑摩叢書 147）筑摩書房、一九七〇年、二五一頁。
- 57 *Ibid.*, p.374.
- 58 アンドレ・モロワ『ヴォルテール』、生島遼一訳（百花文庫 14）、創元社、一九四六年、八四―八八頁。
- 59 Aldous Huxley, *Tragedy and the Whole Truth: Music at Night*, Chatto & Windus, 1931, pp.3-18. 邦訳としては、朱牟田夏雄訳「悲劇と全面的

- 真実」『東西文芸論集』（世界教養全集 別巻2）平凡社、一九六三年、三七―四六頁、などがある。
- 60 ヴォルテール 前掲書、一六三―一六五頁。
- 61 Samuel Johnson, *The History of Rasselas Prince of Abissinia*, Geoffrey Tillotson ed., Oxford University Press, 1971, p. 1. 訳文は以下に掲げる朱
- 牟田夏雄氏のものを用いた。『幸福の探求』（思索選書 88）思索社、一九四九年、一一頁。
- 62 *ibid.*, p. 133. “The conclusion, in which nothing is concluded.”
- 63 *ibid.*, pp. 55-57.
- 64 高橋五郎『人生観』、文栄閣、明治三六（一九〇三）年、一九頁。
- 65 Samuel Johnson, *loc. cit.*, p. 79, p. 132.
- 66 高橋 前掲書、二三頁。